The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞三村晃功著『中世類題集の研究』
Author(s)	中本, 大
Citation	語文. 1996, 66, p. 38-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68899
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

三村晃功著『中世類題集の研究』

中本　大

三村晃功氏の著書『中世類題集の研究』が上梓されて早二年を過ぎる。学界での評価も定着したものであり、贅言を要するまでもないものの、氏の学恩を蒙る後学の立場から敢えて拙文を草することとする。

本書は氏が前著『中世私撰集の研究』（昭和六十、和泉書院）を呈されて後に孜々として考究を続けられた類題集研究の集積である。我々の多くは氏の論稿によって類題集の世界を知り、価値を認識し、蒙を啓かれたのであった。そしてそれは、例えば古記録などによって知られる未見の和歌題の収蔵を周知させる、といった単なる未開拓分野の紹介に留まるものではない。多様な方法論を駆使して、類題集個々の性格を称揚する一方、文学史上での位置付けを明らかにする偉業である。折々に接した論考は総て再構成されて掲出されている。例えば本書の中での白眉とも言うべき第二章・第三節「『題林愚抄』の成立」は「光華女子大学紀要」（平成四）に掲載された時から興味を抱いて熟読したものであったが、その骨子は氏が屢々紹介されてきた散逸歌集の整理作業の段階で既に構想されていたものであったことが、論稿に付された補論の資料によって知らされた。かかる出典（原拠資料）の確認による撰集資料の想定、収載歌人の傾向による性格の検討といった基本的な考察を踏まえ、次いで『明題和歌全集』との比較から「編者の類題集に対する見識を編纂にかなり反映させた、『明題和歌全集』などの網羅主義的な類題集とは一脈違った、生真面目で、オーソドックスな本格派の類題集という側面」（本文二三〇頁）を照射する手法は鮮やかである。筆者は更に、内部徴証から成立時期・編者・編纂目的を考証する。そして、編者については「大胆な憶測」としながらも、後花園院・後土御門院歌壇の廷臣歌人、飛鳥井雅親を想定し、編纂目的については、「和歌を詠ずる際に参考となるべき歌語や和歌的措辞の面で情報提供ができ、また歌合の席などで表現の伝統性にのっとった、いわゆる表現の先例・典拠たりうる例歌の提示ができるような、質・量ともにほぼ完備した古典和歌の集成書を制作して、題詠の初心者へ提供すること」（本文二四二頁）と結論する。編纂目的や編者については今後更に考証・検討する必要があろうが、それらは総て氏の考証を踏まえたものになることは言うまでもあるまい。

如上述べたことは、本書第四節の「『摘題和歌集』の成立」についてもあてはまる。この資料が古典文庫に収められてから、私などはその恩恵に浴してきたのであったが、その際まとめられた解説及び『語文』第五九輯に所収の編者に関する考察が改めて集成されているのは有難い。

類題集は歴代の歌題を整理・類聚・集成したものではあるものの、編纂された各時代の文学的嗜好を映し出す明鏡としても機能していることが（例えば改題や付題の問題もこの範疇に入ろうか）、月並ではあるが、氏の著書を通じて最も印象付けられることである。そして各時代の指向を伺う楽しみが本書に溢れていることは言うまでもない。その意味で、中世、特に室町時代の韻文（もちろん、連歌も含めて）を研究するものにとっては井上宗雄氏の大著と共に必携の書となることは間違いあるまい。（一九九四年一月、和泉書院〈文部省助成図書〉、七六九頁、定価二一、六三〇円）

—本学助手—